

支 部 の ペ ー ジ

平成 26 年度東北支部大会の開催

1. 開催概要

平成 26 年 11 月 7-8 日、秋田県秋田市のアキタスクエア（写真 1）において、平成 26 年度日本水産学会東北支部大会が開催されました。本大会では秋田県水産振興センターのご協力のもと、事務局である東北大学大学院農学研究科が開催事務にあたりました。

大会初日はまず、主催者として東北大学の吾妻行雄支部長からご挨拶いただき、東北支部の現状と会員数減少についてのご説明がありました。また引き続き、開催地代表として秋田県水産振興センターの中村彰男所長からご挨拶があり、東北各県における水産業の復興過程等についてお話していただきました。震災により宮城県沿岸の水産種苗生産施設が壊滅状態にあったなか、比較的被害の少なかった秋田県から宮城県に人手や水産種苗の提供が行われた等、貴重なお話をお聞かせくださり、参加者の皆様も真剣になって聞き入っていました。

ご挨拶の後、初日の午後からはミニシンポジウム「東北沿岸の磯根漁業の再生に向けた新たな取り組みと研究の現状」が開催され、54 名という大勢の参加者で会場は熱気に溢れていました（写真 2）。震災によって特に大きな被害を受けた東北の磯根漁業に関するテーマということで、皆様の関心が高かったものと思われます。活発な意見交換が行われた後、夕方からは支部幹事・連絡幹事合同会議、そして夜には交歓会を行い、秋田名物きりたんぽ鍋を囲みながら会員同士の交流を深めました。2 日目は朝から夕方まで計 22 題の一般研究発表があり、こちらも多くの議論が交わされました。

2. ミニシンポジウム

東日本大震災後、大学・水研・水試の各機関によって東北太平洋沿岸の磯根漁業の被害の実態とその回復過程がこれまでに広くモニタリングされており、被災地の磯根漁業は復興・再生への道を着実に歩んでおります。しかしながら、近年におけるイワガキの身入り不良、漁船に使用する燃料の高騰、あるいは漁業者の高齢化など、幾つかの問題点も浮かび上がっているのが現状です。

本シンポジウムでは、震災後 3 年が経過した東北沿岸の磯根漁業における新たな取り組みと研究の現状について意見交換し、復興と将来に向けた漁業生産の維持・増大への可能性を探ることを趣旨として、中林信康氏（秋田水技セ）・堀井豊充氏（東北水研宮古）・吾妻行雄



写真 1 会場全体の様子



写真 2 ミニシンポジウムでの総合討論

氏（東北大院農）の 3 名がコンピナーとなり、下記の 7 講演と総合討論が行われました。

- ① エゾアワビの資源管理と評価 堀井豊充（東北水研宮古）
- ② イワガキ増産への新たな取り組み 中林信康（秋田水技セ）
- ③ 山形県沿岸域における藻場の現状と藻場保全の取り組みについて 櫻井克聡（山形水試）
- ④ 津波による磯根資源の被害と回復過程 大村敏昭（岩手水技セ）
- ⑤ 福島県における漁場生産力向上対策事業の概要について 榎本昌宏（福島水試）
- ⑥ 茨城県のアワビ漁業～震災の影響と資源管理のための取り組みについて～ 松井俊幸（茨城水試）
- ⑦ 磯焼け発生要因の包括的再検討～海藻の被食防御に対する海況条件の影響 遠藤 光（東北大院農）

総合討論では、今後の東北地方における磯根資源をどう管理・持続させていくかが焦点となりました。特に重要な磯根資源であるアワビについては、沿岸部にあった種苗生産施設が震災により壊滅状態となり、震災から数年間は種苗の放流ができない状態にありました。それが今後のアワビ資源にどのような影響をもたらすかが懸念されています。我々は時間の許す限り、活発な質疑と討論を行いました。震災から3年8ヶ月が経過した東北の海について、こうして議論する場を設けることの意義はとても大きいと思います。アワビやウニなどの磯根資源は、震災時の津波によって大きな被害を受けました。あれから3年以上が経過した現在、海は一見すると震災前の平穏な状態に戻ったかのようにも見受けられますが、地盤沈下、陸上から海に流入した大量の有機物による底質の変化、あるいは防潮堤建設や沿岸部のかさ上げといった人為的な影響など、震災以降の多くの変化がそこに住む生き物たちにとって、今も何らかの影響を与え続けていると思われます。我々東北支部の会員は震災の影響をこれまで以上に注視していく必要と責務を感じており、今後も議論を重ねてまいります。

3. 一般研究発表

一般研究発表は昨年度より4題増え、22題全て口頭発表で行われました。研究対象生物は、ヒラメ・スルメイカ・アユ・アイナメ・マダコ・マボヤ・アサリ・フジツボ・ハタハタ・アカガイ・キタムラサキウニ・ワカメ・アラメ・ナマコ・マガキといった水産生物分類群の多岐にわたっており、内容もDNA解析から生理生態や環境評価など幅広いものでした。東北支部では、若手研究者による一般研究発表（審査希望のあったもの）の中から、東北地方における水産学の活性化および水産業の振興に貢献する優れた研究成果を選定し、支部長賞を授与しています。本大会において支部長の定めた審査委員の評価によって、今回は以下の2題の支部長賞が決定しました。受賞課題の表彰は、今年度の東北支部例会後に行われる予定です。

平成26年度東北支部支部長賞受賞課題

「エゾイソアイナメ (*Physiculus maximowiczii*) とチゴダラ (*P. japonicus*) の分類学的再検討」

発表者：三宅隆人・池田 実・片山知史（東北大学大学院農学研究科）

「LCA法による仙台湾アカガイ漁業の環境影響評価」

発表者：渡邊一仁（気仙沼地方振興事務所）

4. おわりに

今年度は秋田県会員の皆様には大会運営に多大なるご

協力をいただきました。この誌面をお借りして、深く御礼申し上げます。現在東北支部では、毎年各県で大会運営を持ち回ししておりますが、県によっては会員が2～3名しかいないところもあり、大きな負担になっていることと思います。この問題を解決するためにはやはり会員の増加が必要です。東北支部の研究集会はとてもフレンドリーな雰囲気であり、研究発表会場や交歓会場にて気軽に多くの皆様と情報交換することができるメリットがあります。今後も東北各県で支部大会を盛り上げていくことによって我々の活動をできるだけ多くの方々に知っていただき、会員の輪を広げていくつもりです。震災の影響により北里大学所属会員の皆様が東北支部から関東支部へ所属異動となってしまいましたが、今大会で北里大学からのご発表がありましたことは嬉しい限りであります。その他にも東北大学、弘前大学、秋田県立大学からも多くの発表がありました。学生の方にとっては、水研・水試・大学と幅広い方々との交流が持てる数少ない機会かと思えます。

来年度ですが、支部大会は開催せず、代わりに本大会（平成27年度日本水産学会秋季大会）が宮城県仙台市にて開催されます。東北大学農学部が実行委員となり、現在準備を進めているところです。震災後、東北地方で本大会を行うのは初となります。全国からの皆様のご来仙を心よりお待ちしております。

西谷 豪（東北大院農）

平成26年度 第23回全国水産・海洋系 高等学校生徒研究発表 東北地区大会

日時：平成26年10月30日（木）

会場：福島県立いわき海星高等学校

主催：東北地区水産高等学校校長協会

後援：全国水産高等学校校長協会、福島県教育委員会、福島県産業教育振興会

主管：福島県立いわき海星高等学校

参加校：東北地区水産・海洋系高等学校（各校代表1チーム）

【内容】

- ・昨年に引き続き、当大会に水産学会東北支部として参加。東北大学吾妻行雄支部長が出席。
- ・開会の後、地区長（秋田県男鹿海洋高等学校 堀川 渉 校長）の挨拶
- ・9校から発表 発表は13分 質疑なし。
- ・参加校校長および外部審査員による審査（全校一律の審査基準による採点。ただし、自校の採点はなし）。全審査委員の順位点の合計の少ない順番で順位付け。
- ・最優秀校には支部長奨励賞（賞状）を授与。後日、副

賞の盾を送付する。

- 審査結果発表後、吾妻支部長と地区長から講評があった。

最優秀賞（全国大会出場）

青森県八戸水産高等学校「無水活魚輸送の実用化を目指せ！」

優秀賞

山形県立加茂水産高等学校「新しい藻場造成法の研究～Kamo モデルの構築～」

秋田県立男鹿海洋高等学校「廃品を活用した水力発電装置の制作 Part 1」

奨励賞

岩手県立宮古水産高等学校「主役は雑物」

岩手県立高田高等学校「レトルトパウチ食品に関する取り組み」

岩手県立久慈東高等学校「地元食材で6次産業化～第二報～」

宮城県気仙沼向洋高等学校「海から宇宙へ 無線従事者の現状と資格を生かした進路選択」

宮城県水産高等学校「ロープワークのDVD作成」

福島県立いわき海星高等学校「夏でもできるサンマ燻製づくり」

【支部長の講評内容】

9つの発表の中で5つは水産物の新たな食材開発、保存性の向上、鮮度保持法など、費用対効果も考慮して地域の活性化をめざした明瞭な研究の出口があった。ロープワークのDVD化は実用研究であり、水産高校に普及できる。藻場造成の発想と種苗生産のスキルに感銘を受けた。自校のプールで水力発電を考えた発想は驚きである。通信システムの今後の進路選択に向けた具体的な提言が新鮮であった。いずれもプレゼンテーションの技術は高く、わかりやすかった。限られた時間で工夫し、問題点を果敢に克服する姿勢に共感した。指導される先生方の努力を背景に感じることができた。独創性が発表を聞く人を夢中にさせ、発表技術と発表者の熱意が聞く人を納得させる。それが、総合点のわずかな差となり優劣をもたらしたと思う。最優秀賞となった青森県八戸水産高等学校は全国大会に向けて、さらに発表を磨いてがんばっていただきたい。

吾妻行雄（東北大院農）